

サイクロン被災者のために
できること

2008年5月3日、ミャンマー南部を大型サイクロン「ナルギス」が直撃した。ミャンマー史上最悪といわれたこの自然災害。町中の家屋、学校、桟橋、医療施設などは、沿岸から押し寄せた高波に一気に飲み込まれ、町は混乱状態に陥った。JICAは、ミャンマー政府の要請に基づき、3回にわたり緊急援助物資を供与。テントや毛布、給水タンクなど緊急に必要とされる物資を配布するとともに、国際緊急援助隊・医療チームの派遣を即時に決定。被害の最も大きかったラプタの避難キャンプで医療活動を実施した。

ミャンマーの被災地の惨劇は、日本でも連日のように報道された。地震、台風など、自然災害の多い日本。「人ごとではない」と、全国各地で募金活動が始まった。そして1995年の阪神・淡路大震災で被害を受けた淡路島でも、被災地の状況に心を痛める高校生の姿があった。兵庫県立淡路高等学校で「防災と心のケア」を履修する2年生(当時)20人だ。「防災と心のケア」は同校の選択科目。防災マップの作成、災害発生時の対処方法、地域の保育園での防災に関する絵本の読み聞かせなど、震

応援旗を手にし、淡路高校の生徒に手を振るラプタ第一高校の生徒たち



淡路島から
ミャンマーの高校生へ



2008年5月にミャンマーを襲った大型サイクロン。死者・行方不明者が13万8,000人にも及ぶ未曾有の災害となった。その被災地の高校生に、海を越えて、兵庫県立淡路高等学校から励ましのメッセージが届けられた。

ミャンマーの高校生に向けて、心を込めてメッセージを作成する



災の経験を生かした内容となっている。担当の森康成先生は、「震災から14年たった今、当時の記憶がない生徒がほとんどです。授業を通して、震災を『伝え』、語り継いでいくことが目的」と話す。ミャンマーでサイクロンが発生した5月、森先生は授業で災害のニュ

ースを流した。モニターを通して映し出される悲惨な映像に、言葉が失う生徒たち。授業の後、「何か僕たちにできることはないか」という声が自然に上がった。募金活動、救援物資の送付など、いろいろな意見が飛び交う中で、2年生(当時)の藤本雄士さんと桜木歩

さんが「メッセージを書いて、応援旗にして贈ってはどうか」と提案。「それなら僕たちの手でできる」と満場一致で決まった。

大きな白い布に「今はつらいと思うけど頑張って」「信じていればきっといいことがある」など、一人一人の思いを書き込んだ生徒たち。そしてあつという間に、2枚の布はメッセージでいっぱいになり、縦1メートル、横2メートルの応援旗が完成した。

海を越えて
メッセージを届けたい

しかしその後、思わぬ事態が待っていた。災害後の混乱もあり、応援旗を現地に届けるのが難しいということが分かったのだ。約30年前、2年間かけてアフリカ大陸を旅した経験もあるという森先生は、「自分でバックパックを背負って届けに行こうかとも思った」と言う。

このままでは、せつかくの生徒の思いが台無しになってしまう。そこで森先生は、以前からJICAの研修員受け入れや開発教育支援などで縁のあったJICA兵庫に相談。その話はずいぶんJICAミャンマー事務所に伝わり、何としてでもJICAがメッセージを届けることを約束。同事務所の平野潤一職員が「メッセ

ンジャー」となり、淡路高校の生徒たちの思いを直接現地に届けることになった。応援旗が完成してから約半年後の2月、平野職員は、被災地への復興支援の一環として支援が検討されている、小学校、サイクロンシェルターの建設計画のためにラプタを訪問した。そして、村落調査の合間にラプタ第一高校を訪れ、ついに淡路高校の生徒たちの作成した応援旗が届けられた。同校には、サイクロンによって家や家族を失った生徒もたくさんいる。しかし、遠く離れた日本の高校生からの応援旗を手にした彼らの顔は、いつの間にか笑顔であふれていた。

「淡路高校からのメッセージ、しっかりと受け取りました。淡路島の皆さんのように、家族と手を取り合い、周りの人と支え合いながら困難を乗り越え、将来の夢に向かって頑張っていきたい。そう話すマウン・チョー・コーさん(16)さんの言葉には、復興に向けた強い意気込み、頼もしささえを感じた。

海を越えて、ミャンマーに届いた淡路高校の生徒たちの思い。災害を乗り越え、力強く歩み出した被災地との間に、一つの温かいきずなが生まれた。



メッセージの届け先となったラプタは、ミャンマー国内で最も大きな被害を受けた都市の一つ

「淡路高校からのメッセージに元気が出ました」と、ラプタ第一高校のマウンさん(中央)



2008年度「防災と心のケア」を履修した淡路高校の生徒と森先生(右)